２　０　２　３　年　度

香川大学経済学部社会人選抜（夜間主コース）

問　題　用　紙

小論文	６ページ

【注意事項】

１．監督者の「解答始め」という指示があるまで、問題用紙を開かないこと。

２．「解答始め」の合図と同時に、すべての解答用紙に受験番号を書くこと。

３．落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合は、黙って手を挙げて、監督者の指示を受けること。

４．質問があるときやその他の用事があるときは、黙って手を挙げて、監督者の指示を受けること。

５．解答用紙は、設問番号ごとに解答すること。

６．解答は、解答用紙に横書きで記入すること。

７．解答を訂正する場合は、きれいに消してから記入すること。

８．解答用紙及び下書用紙は、片面のみを使用すること。

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

グローバリゼーションとしばしば対比的に捉えられるものに「ナショナルなもの」があります。「ナショナルなもの」というと、まず思い浮かぶのは「国民国家」ですが、それだけではなく自己完結的な経済としての「国民経済」、そして国民（ネイション）という単位やそのなかで共有されているとみなされる「国民文化」や「国民思想」といわれるものなどさまざまなものが含まれます。さらに経済や文化だけでなく、ネイションの基底をなす家族制や共同性、さらに規範や生活様式といったもの、ネイションを想起させる一連の思想や試みなども、ここでいう「ナショナルなもの」を構成しています。

近代国家は、一定の境界によって区切られた領域とそこに居住するとされる国民を単位とすることで、国家としての正統性を確保してきました。したがって「ナショナルなもの」というのは、しばしば近代国家の、そしてそれらが織りなす国際関係の基盤とみなされた国際経済取引、環境汚染や民族間対立など、個別の国家だけでは処理しえない、国境を越える多くの問題を抱えています。グローバリゼーション研究という分野が大きな注目を浴びるようになったきっかけも、戦後体制の転換点と言われたベルリンの壁の崩壊でした。

しかしその後のいわば「ポスト戦後体制」の時代においても、それまでとは時代を画するような出来事が相次いでおり、国民国家や境界の揺らぎが言われるようになってから久しくなりました。人々の日常生活がおびやかされ、不安や恐怖に対処するものとして、一方では公共性やコミュニティが、そして他方では EU などの地域統合や TPP（環太平洋パートナーシップ）のような経済連携協定が議論されています。一方では国家的な単位が揺らぎながらも、他方では、たとえばアメリカ一国主義の台頭、シリア難民の激増と西欧諸国での反移民感情の高まりといったかたちで、ナショナリズムが高揚してきているようにみえます。特にコロナ禍の時代における国境閉鎖や移動制限、さらにはその後のワクチン輸出をめぐる国益の主張は、ナショナリズムの台頭を明るみに出す事態でした。

グローバリゼーションとナショナリズムは相反する事象として対置され、しばしば対抗的に捉えられてきました。それは、グローバリゼーションとは国境を越えるさまざまな動きであり、それに対抗する政治や運動などがナショナリズムであると捉えるような考え方です。そこでは、グローバリゼーションの高揚はナショナリズムの衰退であり、ナショナリズムの高まりはグローバリゼーションの退潮だと考えられてきました。

しかしながら、こうした理解には問題があります。というのも、①じつはこの両者は、決して相反する対抗的なものではなく、むしろ相補的なものだからです。グローバルなものとナショナルなものというのは、対立する概念ではありません。この両者の共振こそがグローバリゼーションを考える際の、もっとも基本的な課題なのです。

グローバリゼーションは、ナショナルな装置や機構を改変あるいは空洞化しながら、国家的な規模で組み替えています。そこでは、ナショナルなものが消失するわけではありません。EU における保護主義の恩恵をもっとも享受したのは、アメリカ多国籍企業の EU 内の子会

社でしたし、特許制度などにおいてはグローバル資本の活動や技術的な優位性は国際的な組織によって守られ、商習慣などが制度化されてきました。

GAFA(M)(注1)と総称される巨大情報産業が世界経済を左右する存在になりえたのは、デジタル化やIT化にかき立てられた先進諸国の保護や法的な措置があったからです。情報産業は、巨額の開発費の支援を国家から受けながら、そこで生じるリスクを国家に負担させてきました。そしていま、EUをはじめとする多くの国は、その規制に動き出しています。さらに、中国系の企業が世界経済を揺るがすまでに巨大化した背景には、改めて指摘するまでもなく中国政府の強力な支援があったのであり、既存のグローバルな秩序の隙間を利用しえたからにほかなりません。

グローバリストは、しばしばナショナリストでもあります。グローバリゼーションと言われながらも、近い将来に国民国家が消失すると考えている人は少数であり、むしろナショナルなものは再編され、部分的には強化されるだろうという見方が一般的です。ナショナリズムとグローバリゼーションとの共犯関係こそ、グローバリゼーションと呼ばれる時代を読み解く鍵となるわけです。

そうしたなかで、政治的ならびに経済的な暴力が人々の生存をおびやかしており、グローバリゼーションへの対抗としてのナショナリズムが新しいかたちで現れてきているようにみえます。ナショナリズムはあたかもグローバリゼーションへの対抗であるかのように取り上げられがちですが、実際にはそうではありません。むしろそうしたナショナリズムと共振関係にあったのは民営化や規制緩和などのネオリベラリズムの政策体系の側であり、それはグローバリゼーションを推進する原動力でした。いまでもナショナリズムの旗のもとに、世界的な規模での法や制度の統合化が拡がり、それに準じた国内の法整備が進められています。

一方、グローバリゼーション批判においては、しばしばグローバリゼーション（あるいはグローバリズム）とネオリベラリズムはほぼ同列に論じられてきました。そしてナショナルな政策の必要性が擁護され、セーフティ・ネットの再構築が主張されてきました。

しかしながら、グローバリゼーションを推進する思想としてグローバリズムを捉えるならば、それが右傾化や新保守主義と結びつく必然性はないことにも留意する必要があります。グローバリズムの暴力への対抗として、そして未曾有（みぞう）の格差に対抗する最後の砦（とりで）として国家があるのは言うまでもありません。ですが、グローバリゼーションはしばしばナショナリズムを利用しながら浸透してきたのであり、反グローバリゼーションをナショナリズムと結びつけて主張するだけでは、グローバリゼーションが提起している問題を明らかにすることはできないでしょう。

グローバリゼーションとナショナリズムの共犯関係というのは、さらに複雑なものです。そもそも近代世界は、相互に結びついたグローバルな世界として編成されながらも、ナショナルな領域へと分割されてきました。近代の国家は、ウェストファリア条約（1648年）にもとづく体制のもと、一方では主権国家による領土と相互不干渉を前提としつつ、他方で国

家間関係において相互承認によって正統性を与えられてきたのです。さらに国際的な政治の場においては、近代国家を達成したとされる国々が、文明化の名のもとに、植民地支配を正当化してきました。閉じたシステムとしての近代国家の形成は、帝国的な開放性をもつ植民地の形成とパラレルだったのです。

また、これまで法の唯一の形成主体であった主権国家がおびやかされているという意味で、法のグローバリゼーションという言葉が用いられることもあります。もちろん、これまでもさまざまな国際法や条約が各国の主権を制限してきました。しかし近年、論じられている法のグローバリゼーションは、従来の国際法の範疇（はんちゅう）に収まるものではありません。これまで国家は唯一の法形成主体とみなされてきましたが、いまでは唯一の法形成主体ではなくなりつつあり、さらには国際的な統治主体としての地位もおびやかされてきています。世界市場でのさまざまな経済紛争は、早急に解決することが求められ、相互間での合議によって解決されます。グローバルな巨大企業によって合意された事項が国家の主権行為を越えて、しかも領土を越えて、グローバルな基準として浸透してきているのです。

さらに文化に関していえば、日本文化やフランス文化のように、しばしばナショナルな単位と結びつけられて、国民文化として考えられてきました。文化と言われてきたものは、そして伝統と言われてきたものは、国民国家形成と深く結びついてきたのです。しかし大衆消費社会の浸透によって、メディアやそれに媒介されたポピュラー・カルチャー、あるいはさまざまな消費様式や生活様式は、ローカルな特性を帯びつつも、共通の経験様式を世界中に拡散してきました。さらに英語の世界化に表れているように、一方では人類にとって初めての世界共通語を生み出したとともに、他方ではその浸透が、世界的な規模での英語の話者と非話者とを差異化する装置として働き、世界的な階層化と排除された人々を創り出しています。文化と言われるもののグローバリゼーションは、豊かな人々による文化の過剰消費とマイノリティ文化の消費を拡大し、価値観の階層化を引き起こしてきたとみることができます。

経済から文化に至るグローバル化が均質な世界を創り出すと考えるならば、それは大きな誤りです。均質なグローバル空間を典型的に表しているのは、市場経済という場であり、経済的グローバリゼーションでしょう。いまや企業活動は世界的な視野で行われ、人々の消費生活は自動車や家電製品などであふれています。ジーンズやスニーカーなどのファッションは若者の世界共通の文化となってからすでに久しくなっています。しかし他方でインターネットの拡がりは、そこから排除された大量の人々を生み出してきました。グローバル消費文化とそれに取り残される人々との亀裂は確実に拡がっているようにみえます。

経済がグローバルであるのに対して、政治や文化はナショナルであるという議論もかなり流通しています。ですが、グローバリゼーションの基本的な矛盾が、政治や文化単位としての国民国家と、経済の越境化、トランスナショナル化とのあいだにあるという議論は、あまりにも単純なものです。むしろ修正しなければならないのは、南北問題という従来的な世界観や国家を単位とする観点でしょう。

中国やインド、東南アジアの新興工業国（NICs）と呼ばれた国々は、近年、所得水準を大幅に引き上げています。そしていまやアフリカ諸地域の産業化も目覚ましく、南と北という分割だけでみれば、所得格差は縮まったというデータもあります。もはや南北問題という区分自体が妥当しなくなってきているのです。現代世界の所得格差は、国民経済という枠組みで捉えることはできず、グローバルな規模で拡大しているとみるべきです。

グローバル資本の世界戦略は、低賃金の余剰労働力を維持する格差の固定化によって支えられています。そして格差を固定する装置として、現在においても国家はもっとも重要な役割を演じています。つまり、賃金格差を固定する装置として出入国管理からシティズンシップ、ナショナリティにいたる人の移動に対する制限が重要な機能を果たしているのであり、これが一部の国の一部の階層の豊かさを守る手段となっているのです。グローバリゼーションの時代には、そうした役割を演じられない国家あるいは地方は、市場から排斥されていくでしょう。

グローバルとナショナルは截然（せつぜん）と分けられるものではありませんし、グローバリストであることとナショナリストであることは矛盾しません。グローバル資本は、国家にリスクを転嫁するとともに国家によって保護され、ナショナルなものを創り出しています。そして、グローバリゼーションを批判的に研究する難しさも、まさにこの点にあります。サスキア・サッセン(注2)の言葉を借りれば、②グローバリゼーションとは「脱国家化（デ・ナショナライズ）」と「再国家化（リ・ナショナライズ）」の過程でもあるのです。

グローバリゼーションは、当初は人々に明るい未来を約束するかのように受け取られました。しかしいま、私たちにとってそれは有益なのでしょうか、それとも不利益をもたらすものなのでしょうか。あるいは、グローバリゼーションは、政策的に対応可能なのでしょうか、それとも時代の流れとして受け入れざるを得ないものなのでしょうか。

これらの問いに対する答えは、イエスであり、ノーでもあります。経済格差の未曾有の拡大、情報のデジタルへの移行、世界の共通語としての英語の浸透、人権思想の拡がりと差別の拡大、地球的規模の環境破壊など、グローバリゼーションといわれてきた事象に関して、多くの議論が展開されてきました。情報技術の発達は遠く離れた人々を瞬時に結びつけ、グローバルな資本はあらゆる資源を利用しうる条件を獲得してきました。グローバル資本だけでなく、グローバリゼーションに対抗する運動も、いまやインターネットを通じて展開され、英語を共通語として発信されます。SNS は、人々を統治する方法として利用されるとともに、グローバル資本に対抗する手段としても利用されているわけです。もはや人々は、こうした状況からまぬがれる術はないでしょう。

グローバル資本による世界的な統合化はネオリベラリズム政策に支えられた徹底した市場化をもたらし、格差や差異化を極端なまでに拡大してきました。しかもそうした格差や差異化は、これまでの国内ならびに国家間という境界によって一義的に区分されるのではありません。かつての第一世界と第三世界は交差し、豊かさと貧しさは世界の至るところに遍在しています。あらゆる人々が労働力として動員され、人々の生活や労働が政治の保護を失

ってきているのです。

教育や衛生あるいは福祉といった近代国家を支えてきた核心的な装置から、軍事や警察活動までもが市場化され、労働をめぐる環境は極端なまでに悪化しています。コロナ禍の世界は、医療と衛生への民営化と市場原理の導入、感染症の世界的流行という脅威への対応を市場原理にまかせたことの誤りを示しています。人々のあらゆる営みや身体までもが商品として生産され、消費されることになり、日常生活を支えてきた生存がおびやかされています。近代資本主義の最大の特質が労働力の商品化にあるとするならば、グローバリゼーションとは、それを、女性を含めて、世界的な規模で極限まで推し進めてきた時代だということができるでしょう。

シグムント・バウマン(注3)は、「グローバリゼーション」という語は決まり文句として流通しているが、それは「ある人にとって、幸福になりたければそうすべき対象であり、他の人たちにとっては不幸の原因でもある。しかしながら、すべての人たちにとって、手に負えない世界の運命であり、不可逆的過程である」と述べ、ある人にとってグローバルであることは、別の人にとってはローカルに固定されることであり、「われわれすべては、グローバル化されている」とつけ加えています。

グローバリゼーションでは、統合と分割とが同じメダルの表と裏として進行します。ある人たちにとっては自由を切り開き、幸福をもたらすものですが、他の人たちには悲惨な運命が待ち受けています。グローバルであることとローカルであること、グローバリゼーションとローカリゼーションは同じ過程の裏と表であり、その中間はありません。グローバルな空間の平準化とローカルな場の固定化が極端なまでに進み、空間的な統合が、改めてローカルな場という問題を浮上させてきています。

空間的な統合と具体的な場との乖離(かいり)を読み解く一つの鍵は、人の移動にあります。「グローバル・マス・マイグレーション」というべき現代の人の移動は、国民国家に代表される領域的空間から一連の社会関係、社会現象、社会的過程が切り離されていくことにかかわっています。

そしてナショナルなもの、さらにはナショナリズムが問題となるのは、ローカルな場であり、国民国家はそのなかで依然として特権的な位置を占め続けています。グローバリゼーションへの対抗はしばしばナショナリズムと結びつき、それがグローバルな機構や装置の強化に加担します。しかし他方で、グローバル資本はヴァーチャルな空間のみにあるのではありません。それを動かす具体的な場と人が必要です。その典型的な場がグローバル・シティです。グローバルな空間としてのグローバル・シティには、世界経済を支配する多くの機能が集積するだけでなく、そうした機能を担う人々が世界中から集まり、グローバル経済、そしてグローバルな政治や社会、文化を担っています。

グローバリゼーションを学ぶとは、グローバリゼーションへの対抗として生まれてきているさまざまなローカリゼーションの運動を考えることでもあります。対抗的な運動というのはどのようにすれば可能でしょうか。この問いに答えるためにまず必要とされるのは、

時代としてのグローバリゼーションを把握することであり、国民と領土を暗然のうちに一致させてきた空間認識のあり方を捉え返し、知の枠組みを転換していくことなのです。

出典：
伊豫谷登士翁『グローバリゼーション―移動から現代を読みとく』筑摩書房、2021 年（一部改変）。

注：
（注１）GAFA(M)
IT 産業で圧倒的な優位性をもつ４つ（５つ）のグローバル企業 Google、Apple、Facebook（現 Meta Platforms）、Amazon、Microsoft を指す言葉。

（注２）サスキア・サッセン
アルゼンチン出身の社会学者で、グローバリゼーション研究の第一人者。

（注 3）ジグムント・バウマン
ポーランド出身の社会学者。ポスト近代社会を「リキッド・モダニティ」と定義したことで知られる。

設問
問１　下線部①について、なぜ筆者はこのように述べているのか、300 字以内で説明しなさい。

問２　下線部②について、なぜ筆者はこのように述べているのか、400 字以内で説明しなさい。

問３　グローバリゼーションのマイナス面を挙げたうえで、どうすればそれを緩和したり改善したりすることができるのか、あなたの考えを 500 字以内で述べなさい。

問題訂正

5ページ10行目

誤：　シグムント・バウマン

↓

正：　ジグムント・バウマン